

学生海外調査研究	
14 世紀初期イングランド宮廷及びエドワード二世に関する史料調査	
常木 清夏	比較社会文化学専攻
期間	2010 年 11 月 30 日～2010 年 12 月 22 日
場所	イギリス（オックスフォード、ロンドン、グロスター）
施設	オックスフォード大学ボードリアン図書館、イギリス国立公文書館、グロスター大聖堂、テュークスベリー・アビー

内容報告

1. 海外調査研究の必要性及び目的

報告者は、主にジェンダーやセクシュアリティの観点から、中世イングランドにおける人的結合関係を研究している。ある社会集団の中で共有されている道徳観念や行動様式を考察することで、その集団の思考様式的一端を明らかにすることができる。そこで、14 世紀初期のイングランドを対象に年代記を初めとする当時の叙述史料を分析することで、当時の宮廷内において共有されていた思考様式を明らかにしようと研究を進めている。そこから、その思考様式が戦争や政変にいかに関与しているかについても考察することが可能であろう。修士論文とそれに基づく投稿論文では、イングランド国王エドワード二世（1284-1327 在位 1307-1327）と二人の寵臣、ピアズ・ガヴェストン（1312 年没）ならびにヒュー・ディスペンサー二世（1326 年没）を取り上げて、国王とこの二人の男性それぞれとの関係が同時代に書かれた年代記 *Vita Edwardi Secundi* 内においてどう描写されているかを分析した¹。それにより、14 世紀初期イングランドの宮廷内では男性同士の絆が極めて重視されており、その絆の維持と調和が重視されていたことを明らかにした。それと同時に、対象者の政治的な失脚を意図して、男性同士の親密な絆がソドミーの文脈でバッシングされていたことも指摘した。この研究を博士論文に向けて更に発展させるには、この研究結果を他の文書記録と比較することで、一般化が可能か否かを検証しなくてはならない。そのために必要とされる史料は、現時点で二つ考えられる。まず、同時代の他の年代記を多数分析する必要がある。年代記作者のバックグラウンドや出自が多様であるにも関わらず、エドワード二世を初め宮廷の人物描写もしくは関係描写に共通の見解を見出せるならば、その見解はイングランドの広範囲に渡って、14 世紀初期の人々が共有していたものであると言えるのではないだろうか。次に、チャーターなどの公文書と内容を比較する必

要がある。年代記に書かれている内容が独自のものなのか、それとも宮廷の公的な記録にも記載されているものなのかを検証することで、多角的な視点からの分析が可能になる。以上のことを踏まえて今回の海外調査では、日本では手にいれられない年代記史料や二次文献の収集、チャーター（証書）を初めとする公文書の原本の閲覧及びその複製の収集、そしてエドワード二世や宮廷に密接に関わりのある史料の確認及び調査を行った。

2. 調査の概要

2.1 オックスフォード大学ボードリアン図書館 (Bodleian Library)

オックスフォード大学ボードリアン図書館はオックスフォード大学に属する学術図書館であり、国立図書館 (British Library) に次ぐイギリス第二の規模を誇っている。今回ボードリアン図書館を訪れた目的は主に二つある。第一の目的として、これまでの研究でメインの分析対象として取り上げてきた 14 世紀初期に書かれた年代記 *Vita Edwardi Secundi* のマニュスクリプトをマイクロフィルムで確認することである。日本では、この年代記は刊本のみ入手可能であり、マイクロフィルム版もない²。後述するように、ボードリアン図書館に所蔵されているこのマニュスクリプトは 18 世紀に作成された写本であり、14 世紀当時のものではない。しかし、現存する最古の *Vita Edwardi Secundi* のマニュスクリプトはこのボードリアン図書館所蔵のものだけであり、現在発行されている刊本は全てこれに依拠している。このマニュスクリプトが全ての刊本の元になっているとはいえ、刊本の編者それぞれの解釈により、本文中のラテン語単語や活用に関しては微妙に異なる箇所がある。現存する最古のマニュスクリプトを改めて確認することは、自身が内容解釈をする際に有益であると考えて今回の閲覧に至った。今回、ボードリアン図書館で閲覧した *Vita Edwardi Secundi* のマニュスクリプトは、1729 年にトマス・ハーンが作成し

た写本である。1728年にインナーテンブルのジェームズ・ウエストが、ジャーバス・ホールズ（1674年没）というマニュスクリプト収集家が所持していたマニュスクリプトを入手し、このマニュスクリプトの調査をオックスフォードの古物研究家であったハーンに依頼した。彼は、このマニュスクリプトは元々二つに分かれており、それをおそらくホールズが17世紀の一つに合わせたのではないかという見解を示した。ウエストが所持していたマニュスクリプトの後半部分が、現在の *Vita Edwardi Secundi* 部分である。1730年に、ハーンはこのマニュスクリプトの写本を作成し、元のマニュスクリプトはウエストに返却する。しかし、1737年にインナーテンブルで火事が起こり、ウエストのマニュスクリプトは火事で焼失してしまう。結果として、ハーンが作成した写本のみが残され、それがボードリアン図書館 Rawlinson MS B. 180.として所蔵されているマニュスクリプトである³。今回はマイクロフィルムの使用方法を学習するため、またマイクロフィルムで文字を読むことに慣れるためもあって、あえてマイクロフィルム形式で年代記を閲覧した。レバーを回しているうちにどのページを見ているかわからなくなるという初心者にありがちな問題が頻繁に生じて苦戦したが、ハーンが原写本から書き写したものの、すなわち現存する最古のマニュスクリプトを確認することで、史料そのものについて改めて考察する機会を得ることができた。

ボードリアン図書館利用の第二の目的は、オックスフォード大学所属の博士論文の閲覧兼複写申請をすることである。博士論文では、エドワード二世治世末期のイングランド宮廷を政治文化史の面から考察したいと考えているが、そのためにはエドワード二世妃イザベラの動向について深く知ることが不可欠である。イザベラはエドワード二世治世末期からエドワード三世治世初期を考える際に重要な人物である。1325年にサン・サルド戦争の戦後処理とフランス王に対する臣従問題の解決のために、イザベラは王太子エドワードを連れて渡仏した。彼女は目的を果たした後もフランスに留まり続け、イングランド側からの再三の帰国要求にも応じず、エドワードと対立することになった。彼女は恋人であったとされるロジャー・モーティマーやイングランドから追放された人々に合流し、1326年9月に兵を率いてイングランドに上陸した。ロンドン他、イングランド諸都市の支持を取り付けると、ディスペンサー父子を捕縛して処刑した。国王であるエドワードは王位を剥奪されて、翌1327年1月に亡くなっている。王位は王太子であった息子のエドワードが継承してエドワード三世として即位したが、彼の治世の初期はイザベラとモーティマーが権勢をふるった。1330年にエドワード二世の死に加担したという罪状でモーティマーが処刑された後はイザベラも失脚するが、彼女がエドワード二世治世末期からエドワード三世治世

の初期において多大な影響を与えた人物であるのは間違いない。収入面から見ても、彼女はどの伯とも肩を並べることのできる存在であり、豪勢な家政組織が与えられて莫大な出費が許されていた。このように、イザベラは14世紀初期のイングランド宮廷について考察する際に欠かせない重要な人物であるにも関わらず、彼女に関するまとまった研究は多くない。数少ないイザベラの伝記のうち、歴史作家ポール・ドハーティの *Isabella and the Strange Death of Edward II* は、豊富な史料に裏打ちされた学術的にも信頼がおける文献である⁴。彼のこの著作は、オックスフォード大学での博士号取得のために書かれた彼自身の学位論文を元にしており⁵。この学位論文を入手することで、以後のイザベラ研究に必要な情報を多数得られるのではないかと期待して、閲覧申請を提出した。博士論文の複写申請はマニュスクリプトの複写申請と同じ扱いで、閲覧者自身でコピーすることができない。図書館スタッフに依頼するのだが、あいにく大学が冬期休暇に入っていたため滞在期間中の受け取りができず、郵送してもらうこととなった。論文の内容は、極めてよくまとまったイザベラの伝記であり、1308年のエドワードとイザベラの婚姻以前からエドワード三世期初頭までのイザベラの動向が、豊富な史料を元に詳細に記載されている。個人的に、この論文内の情報で最も重要と考えているのは、他の学術論文や概説書になかなかまとまって載っていないエドワード二世治世前期から治世中期までのイザベラの動向について記載されていることである。年代記 *Vita Edwardi Secundi* によれば、イザベラはディスペンサーが夫婦の間を裂いているとして抗議しており、イザベラとディスペンサーの関係が良好でなかったことが記されている⁶。年代記のこの記述を取り上げた文献は複数存在する一方で、イザベラともう一人の寵臣とされているガヴェストンの関係について考察した文献はあまり見当たらなかった。そもそも、治世末期になるまでイザベラ存在はあまり表に出てこないのである。しかし、ドハーティのこの論文にはイザベラとガヴェストンの関係についての考察や1314年のイザベラのフランス滞在時におきた義妹の不義密通事件など、イングランド宮廷内外の動向が詳細に記されている。そのため、この論文の入手によって、イザベラの実たした役割について改めて考察することが可能となった。

2.2 イギリス国立公文書館 (The National Archives)

ロンドンではイギリス国立公文書館 (The National Archives) を訪れた。ここを訪問した目的は、エドワード二世治世の公文書、中でもチャーターの現物を確認することである。チャーターは、記載されている内容自体も重要だが、チャーターに書かれている証人の名前一覧を使って、年代記に書かれている情報が正しいかの裏を取るためにも利用できる。チャーター、すなわち国王が発給する証書は、

王と共に移動中の宮廷が滞在している場所が発給地として書き込まれており、その際、王に供していた主だった臣下たちが証人として名を連ねるのが普通である。その情報を利用して、年代記の記載と史実とで異なっている箇所を明らかにすることができる。例えば、ヨッヘン・ブルグトーフの研究では、エドワード二世治世下に書かれた年代記 *Annales Paulini* の記述をチャーターの証人名から検証して、史実にはなかったことを年代記があったと主張している箇所を明らかにしている⁸。これは、年代記作者は実際にあったことだけではなく「あり得そうなこと」もあったように書いている場合があるという事例であり、作者があえて記述した内容を考察することで、作者の意図について考察することができる。このように、証書と年代記を照らし合わせて分析することで年代記作者の見解をより明確にすることができ、結果的に同時代の特徴を浮かび上がらせることにも繋がる。

今回、公文書館を訪れたことで最も有益であったのは、現物の史料を自身の手で触って、紙やインク、文字の並びなどを直接確かめることができたことである。内容を確認するだけならば複写で事足りる場合もあるだろうが、史料全体がどのような構成になっているかを把握するには現物を見るしかない。しかしながら、イギリス史研究者にとって日本にいながら現物の史料にあたることはなかなか難しい。そのため、今回の海外調査のような貴重な機会を有効に活用して、史料そのものに関する知識を今後も増やしていきたい。また、利用者カードの作成とエドワード二世治世部分にあたる公文書の該当ページの一覧を目録から作成することができたので、これから先の研究で他の公文書が必要となった際に、スムーズに複写を取り寄せることが可能になった。これも、現地のみで可能な作業であるたえ、貴重な機会を得ることができた。

2.3 グロスター大聖堂 (Gloucester Cathedral)

グロスターシャーの州都であるグロスターにあるグロスター大聖堂は、かつてベネディクト会の聖ピーター修道院であった。ここには、エドワード二世の墓がある。1326年にニース修道院で捕えられたエドワード二世は、ケニルワース城に連れて行かれた。1327年1月ウェストミンスターにパラメントが召集され、開会とともに国王廃位に向けて世論の盛り上げが行われた。エドワードの政治能力の欠如、愚昧さ、弱さが力説され、廃位の正当性が説かれた。すなわち、王の名において召集されたパラメントが王を廃するという自己撞着の事態がおきたのである。パラメントに召集された各身分の構成員を含む代表団が王の元に訪れ、その代表団の一人が全王国の臣民を代表してエドワードに対するあらゆる臣従と忠誠を放棄した。こうしてエドワード二世は廃位され、1327年2月1日にエドワード三世が戴冠した。エドワード二世は、その後私人として監禁状態

に置かれていたが、この年の9月にパークリー城で亡くなった。殺害されたとも言われている。同年10月21日に、エドワードの遺体は聖ピーター修道院に運ばれた。その遺体を見ようと多くの群衆が詰めかけ、人員整理のための柵が必要なほどであったという。同年12月20日にエドワード三世とイザベラも出席して葬儀が行われた。当初の墓はパーベック大理石の台でできたシンプルなものであったが、エドワード三世の命により十年の歳月をかけて豪華な墓が造られた。はめ込まれていた宝石や設置されていたはずの石像などが現在はもはや欠けてしまっていることを思えば、出来上がったばかりの墓は今見ることができるもの以上に立派であったろうことが想定される。以降、彼の墓には膨大な数の巡礼者が訪れており、1378年には時の国王であるリチャード二世が訪れたことも記録されている。巡礼者による寄付と王家の庇護により修道院は聖歌隊席や内陣を改装することができ、今日でも有名な回廊が造られた。すなわち、このエドワード二世の墓は修道院に多大な恩恵をもたらしたのである。今回訪れた際には、隅々まで墓を確認することができ、資料用に多数の写真も撮ることができた。墓に関する詳細な資料も購入できたので、エドワード二世の死や葬儀について考察する際に有効に活かしたい。

2.4 テュークスベリー・アビー (Tewkesbury Abbey)

テュークスベリー・アビーは、現在はグロスターシャーにおいて第二の規模を誇るアングロ・カソリックの教区教会であるが、宗教改革以前にはベネディクト会修道院であった。初代グロスター伯ロバートを初め、代々のグロスター伯の庇護を受けてきた修道院であり、ここにヒュー・ディスペンサー二世の墓がある。ディスペンサー二世はヒュー・ディスペンサー一世(1261-1326)の息子であり、父子ともにエドワード二世治世中期から末期にかけて宮廷内の実力者であった。ディスペンサー二世はグロスター伯領の女子相続人の一人であるエリナー・ド・クレアと結婚していた。クレア家はヘンリー一世の時代からウェールズ辺境地方南部の有力家系であったが、1314年にグロスター伯ギルバート・ド・クレアがバノックバーンで戦死した後、グロスター伯領はエリナーを含む伯の三人の姉妹に分割して引き継がれることとなった。この財産相続により、ディスペンサー二世はウェールズ辺境のグラモーガンに所領を得て、ここを足がかりに強引な勢力拡大のり出し、他の諸侯から強い反発を受けた。彼はその後宮廷内で権力を握り、最終的には前述の通り父親共々1326年に処刑される。1330年に国王の許可を得て、彼の妻であるエリナーは夫の遺骨を集めてテュークスベリー修道院に埋葬した。今でも彼の墓はテアビーの中にあり、棺を見ることができる。

ディスペンサー二世はテュークスベリー修道院の改装を手掛け、彼が亡くなった後はエリナーと息子のヒューがそれを引き継いで完成させた。アビー内

には、その改装の際に作成されたとされるデイスペンサー二世の姿を描いたステンドグラスがある。彼のステンドグラスの両側には、修道院の創始者であるロバート・フィッツハモン（1107年没）と初代グロスター伯であるギルバート・ド・クレア（1230年没）のステンドグラスが並べられている。デイスペンサー二世について研究する際、クレア家の財産相続ならびに相続人であったエリナーについて知ることは極めて重要なことである。テュークスベリー・アビーは、当時のクレア家とデイスペンサー家の財力と権力の大きさを視覚的に窺い知ることができた場所であった。

3. 今後の研究計画、展望

今回の調査では、年代記史料及び公文書の閲覧のみならず、これからの研究に必要な二次文献も多数収集することができた。また、文献だけでなく14世紀当時の姿を留めている史跡も訪れることができ、時代感覚を掴むという意味でも有意義であった。今後、より包括的な視点から14世紀初期イングランド宮廷内の人的結合関係を考察することが可能になると思われる。また、それがどう政治に影響したかも、多角的な角度から考察できるであろう。これまでの研究で、年代記 *Vita Edwardi Secundi* においてガヴェストンとデイスペンサーに対する批判の内容に違いがある理由は、時間の経過によるものだという仮説を立てた。14世紀初期にセクシュアリティを理由にして逮捕されるという事件が複数おきていることから、エドワード二世治世が進むに連れて、人々のセクシュアリティに対する態度が徐々に不寛容になっていき、それが寵臣に対する人々の態度にも影響を与えたという仮説である。時代的なこの変化は、セクシュアリティそのものに関する意識の変化だけではなく、セクシュアリティを政治的に利用するという習慣が成立していった時期であるために生じたという仮説も成り立つ。どちらの仮説にしても、実証するためには、キーパーソンである王妃イザベラの動向や彼女と関わりの深いフランス宮廷の動向を調べ、公文書の記録からの考察も行わなくてはならない。今回の調査で得た史料を基に、14世紀イングランド宮廷におけるセクシュアリティ観の一端を明らかにし、成果を2011年度の『人間文化創成科学論叢』に投稿したいと考えている。中世イングランドにおけるセクシュアリティ観を明らかにできれば、歴史研究の面で有益であるだけでなく、

ジェンダー・セクシュアリティ研究においても新たな視点を提供できるだろう。そして、ある国ある時代のサンプルケースとして留まらずにグローバルな視点から比較検討することで、これからの多様性社会について考える大きなヒントにもなり得ると考える。このことも視野に入れ、今後も本研究を継続していきたい。

注

1. 「エドワード二世宮廷における男同士の絆——*Vita Edwardi Secundi* を中心に——」、『ジェンダー研究』（お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報）14（2011年3月刊行予定）
2. *Vita Edwardi Secundi* の刊本は、N. Denholm-Young, (ed.), *Vita Edwardi Secundi: The Life of Edward the Second by the So-called Monk of Malmesbury*, (London, 1957). と、W. R. Childs, (ed.), *Vita Edwardi Secundi: The Life of Edward the Second* (New York, 2005). がある。両方ともラテン語原文に英訳が併記されている。
3. マニユスクリプトの来歴については、Childs, *op.cit.*, pp. xv-xvii. を参照。
4. P. C. Doherty, *Isabella and the Strange Death of Edward II* (London, 2003).
5. P. C. Doherty, 'Isabella, Queen of England, 1296-1330' (D.Phil., Oxford, 1977).
6. Childs, *op.cit.*, p. 242: 'respondit regina, 'Ego,' inquit, 'senciens, quod matrimonium sit uiri et mulieris coniunctio, indiuiduam uite consuetudinem retinens, mediumque esse qui inter maritum meum et me huiusmodi uinculum nititur diuidere; protestor me nolle redire donec auferatur medius ille, set, exuta ueste nupciali, uiduitatis et luctus uestes assumam donec de huiusmodi Phariseo uiderim ulcionem.'
7. W. Stubbs, (ed.), *Chronicles of the Reigns of Edward I and Edward II* (Rolls Series, 1882-3, 2 vols), i, pp. 253-370.
8. J. Burgdorf, "With my life, his Joyes began and ended": Piers Gaveston and King Edward II of England Revisited" in N. Saul (ed.), *Fourteenth Century England V* (Woodbridge, 2008), p. 37.